



TITLE:

漢代明經考

AUTHOR(S):

西川, 利文

CITATION:

西川, 利文. 漢代明經考. 東洋史研究 1996, 54(4): 583-609

ISSUE DATE:

1996-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154552>

RIGHT:

東洋史研究

第五十四卷 第四號 平成八年三月發行

漢代明經考

西川利文

はじめに

一 明經の語の出現とその意義

二 詔より見た明經科

三 明經科の諸相

(一) 「學明經」の實態

(二) 平帝期と光武帝期の明經

(三) 成帝期の明經

四 明經科の成立とその性格

おわりに

はじめに

漢代關連の史料において、明經（經明）の語は盛んに用いられ、さらには「好學明經」「經明行脩（經明行修）」という定

型句が散見される。この明經（以下、「好學明經」などの定型句も含む）とは、文字通り「經に明らか」なことであり、個人が經書・經學に通曉していることを表わす語であるとともに、さらに經書・經學の知識を實際の政治に應用できる能力をも合わせ持つことを意味したと考えられる⁽¹⁾。すなわち、個人が儒學に優れた能力を有することを評價する語なのである。このような意味内容を持つ明經の語は、政治への儒學の重要度の高まりとともに、官僚を登用する際の基準ともなっていく。例えば科擧の科目に明經科が存在することは周知のことであるし、また魏晉南北朝時代にも明經による科擧が行われている⁽²⁾。その起源は、本稿で取り扱う漢代に求められるのである。

それでは、漢代において明經科という科擧科目はいつ成立し、それはどのような性格だったのか。これについては、從來さまざまな見解⁽³⁾が出され、定説を見ていない状態である。その最大の原因は、いずれの研究も明經科について十分に考察を行っていないことであろう。ただその背景には、史料上の限界があることも否めない。また、明經の語をいかに判断するかにも問題がある。評價の語としての明經も、本稿で述べるように官僚の登用と密接に関連しているのである。そこで史料に出てくる明經について、どれを科擧科目と判断するかによって、明經科の評價が大きく別れることになる。

このような現状にあって、明經科を含む漢代の明經一般について最も具體的に考察したのは平井正士氏であろう。氏は、史料における「經に明らかなるを以て（官名）と爲る（「以明經爲……」）」と「明經に擧げらる（「擧明經」）」との記載の違いに注目して、前者を評價としての明經、後者を科擧科目の明經科と考え、最初は評價の語として存在したものが、前漢成帝期前後に科擧科目として確立したとする⁽⁴⁾。ただ氏の主眼は、明經科についてではなく教育制度の變遷にある。そこで後で述べるように、氏の明經科についての考察には不十分な面もあるが、この指摘は甚だ示唆に富む。本稿でも當面、平井氏の設定したこの基準に従って、明經を評價の語と科擧科目の語とに分けて考えることにしたい。

ところで、科擧科目として成立する以前に明經が評價の語として存在したとすれば、それはいつごろ出現するのだろうか。實はこの點についても從來、十分に考察が行われていない。そこでまずはこの點を考察し、その上で科擧科目として

の明經科の問題に入ることにしよう。

一 明經の語の出現とその意義

明經の語が史料の中で時期的に最も早く使われるのはいつかを探してみると、管見の及ぶ限り『漢書』卷八九循吏傳に、

（文翁）出でて縣めどを行る毎に、益おほく學官諸生の經に明るく行に飭ととのう者〔明經飭行者〕を従え與とも俱にし、教令を傳え、閭閻めどに出入せしむ。

とある文翁傳の記事が最初である。これは文翁が蜀郡守になった時のことであるから、景帝の末にあたる。これに次ぐものとしては、やはり『漢書』に「經に明らかなるを以て、大將軍莫府に給事」した蔡義の例（卷六六）があり、これは武帝期である。正史以外の史料でも、これより早い明經の記事は見出せない。すなわち、明經の語の出現はそれほど古くなく、武帝の即位前後ということになるのである。

しかしこの事實から直ちに、明經の語の出現をこの時期に求めることはできない。何故なら、その出現と同時代の史料である『史記』に、明經の語が見出せないからである。ただ『史記』を注意して見ると、卷一二一儒林傳序に、

今上（武帝）位に即くに及び、趙綰・王臧の屬、儒學に明らかにして〔明儒學〕、上も亦た之に郷むかい、是に於いて方正賢良文學の士を招く。

とあり、同じく儒林傳の董仲舒傳に、

漢興りて五世の間に至り、唯だ董仲舒のみ名づけて春秋に明らか〔明於春秋〕と爲し、其の公羊氏を傳うるなり。

と記す例がある。これらは、「明」のあとに「儒學」や經書名があつて、實質的に明經と同義語と考えられるのである。特に後者の場合、明經に限りなく近い。そしてこの二例はいずれも、前の文翁の記事と同様に、景帝期から武帝期にかけ

ての時期に關する記事であり、『史記』ではこの「明」の用法が、これより前の時期の記事には見えないことは注目される。⁽⁵⁾すなわち、『史記』には明經の語は見えないが、それと同様の内容を持つ「明」の用法が、『漢書』で明經が最初に使われるようになる時期と一致するのである。

ここで少し視點を變えて、明經あるいは「明」以外に、何らかの學問に通曉していることをどのような語で表わしていたのかを考えてみよう。その恰好の例は少し時代は下るが、『後漢書』傳一四馬嚴傳にある彼の子の馬續に關する記事である。そこには、

七歳にして能く論語に通じ、十三にして尙書に明らかにして、十六にして詩を治め、博く羣籍を觀、九章算術を善くす。

とある。ここで「明」とともに使われている「通」「治」「善」の語はいずれも、何らかの學問に通曉していることを表わすものと考えられる。いまこれらの語の用例を『史記』から探してみると、例えば卷四七孔子世家には「孔子、詩書禮樂を以て教え、弟子、蓋し三千人、身六藝に通ずる者七十有二人」とあり、また儒林傳の伏生傳には「孝文帝の時、能く尙書を治む者を求めんと欲し、天下有る無く、乃ち伏生の能く治むを聞き、之を召さんと欲す」とあるなど、「明」が使われるよりも早い時期の記事に對しても用いられていることがわかる。この傾向は、『漢書』でも同様である。⁽⁶⁾さらに『後漢書』の記事からもわかる通り、これらの語は「明」が使われはじめてからも、消滅することなく存在している。すなわち、他に同様の意味を表わす語がすでに存在したにもかかわらず、それに加えて武帝の即位前後から新たに「明」が使われるようになるのである。

ここで注目すべきは、「明」以外の「通」「治」「善」などの語が、明經のように「經」と直接結び付くことがほとんどないことである。「通」には「通經」「通經術」「通經書」など明經に比較的近い用法が見られるが、その他の語にはこのような表現は見られない。また「通」の場合も、これらの用法はそれほど多くなく、中でも明經と全く同一だと考え

られる「通經」は後漢中期以降に見られるだけで、明經ほど一般的な表現ではなかったようである。すなわち、遅れて現われた「明」のみが出現時から「經」と結び付き、「明經」という定型句を生み出すのである。逆にいえば、「明」は明經の語の存在を前提としていたと考えられるのである。ここから、『史記』には明經の語は見えないが「明」の語があることによって、司馬遷の當時に明經の語が存在したことが豫想される。それが前に掲げた文翁傳の記事として『漢書』に残ったと考えられよう。

それでは何故、明經が武帝の即位前後から使われるようになるのか。その事情を考えなければならない。

明經とははじめに述べたような意味内容を持っていたと考えられるが、その語自体は極めて抽象的な言葉である。例えば、王吉は「五經に兼通」してしたことによって「少くして學を好み經に明らか」であるとされた（『漢書』卷七二）。これに對して睦弘は「長じて乃ち節を變じ、嬴公に従い春秋を受け、經に明らかなるを以て議郎と爲る」（『漢書』卷七五）とあるように、『春秋』に通曉したことのみによって明經と評價されている。すなわち明經とは、どの經書を學ぶかに關係なく何らかの經書に通曉していれば、全て包攝できる概念なのである。このように抽象的な概念だったからこそ、明經は個人の能力に對する評價の語として定着したと考えられる。

しかし明經は、單なる評價の語として存在したのではない。例えば右に引いた睦弘や王吉は、明經の評價によって官僚や屬吏に採用されたと考えられる。⁽⁸⁾さらに明經の最初の例として挙げた文翁傳の記事からも同様のことがいえる。それによると、文翁が管轄下にある蜀郡の縣の視察に學官弟子の明經飭行者を伴ったことによって、一般市民ばかりでなく、富豪たちは金錢を出してまで學官弟子になろうとしたという。⁽⁹⁾これは、その前の記事と合わせると、學官弟子となれば郡縣の屬吏に任用され、さらに官僚への道が開けたからであろう。すなわち、明經は出現當初から政治的色彩が極めて濃いものであり、明經の評價を受けることは、官僚・屬吏として官僚機構に取り込まれることを前提としていたと考えられるのである。

鎌田重雄氏によれば、官僚を登用する際に明經なることが重要になるのは、昭帝期に霍光が政權を掌握し、いわゆる經術主義を政治の根本方針としてから以後のことであるという。⁽¹⁰⁾確かにこの前後には、郡縣の屬吏に明經なる者が採用されるようになる。⁽¹¹⁾また「士は經術に明らかならざるを病む、經術苟も明らかなれば、其の青紫を取ること俛して地芥を拾うが如きのみ、經を學びて明らかならざれば、歸りて耕すに如かず」(『漢書』卷七五夏侯勝傳)というように、經書・經學に通曉し明經なる評價を受ければ、官僚となること(取青紫)は地に落ちてゐるごみを拾うが如く容易になるといわれるようになる。しかし、明經の持つ意味が昭帝期を境にして變つたというのではなく、右に見たようにこの語は出現の當初から官僚・屬吏の採用と密接に結び付いていたと考えられるのである。そしてそれが武帝期前後に現われたとすれば、そこには當然、儒學の官學化⁽¹²⁾との關係が考えられよう。

周知の通り、武帝の即位前後から儒學の官學化へ向けての動きが見られる。ただその實效性については、それを疑問視するさまざまな見解が出されている。⁽¹³⁾しかし官學化の動きの中で、その實施を否定できないのは博士弟子制度である。この制度は、國家自らが儒家的知識を持った官僚・屬吏を養成し、その波及效果として地方における儒家的知識人の輩出をもねらったものだったと考えられる。⁽¹⁴⁾このように國家自らが特定の學問を身に付けた者を養成しようとしたこと自体、その學問を官學として位置付け、それを身に付けた者を官僚とすることを保證したことを意味する。ただし、これによって直ちに官僚機構が儒學一色になるわけではなく、儒家官僚が大勢を占めるためにはかなりの時間を要した。⁽¹⁵⁾このことが、武帝期における儒學の官學化を疑問視させる原因ともなるのである。しかし、武帝期に儒學を官學として位置付け、儒家官僚の登用を保證しなければ、後の儒家官僚一色の時代も到來しなかったのである。

以上のように、儒學の官學化が儒家官僚の登用を前提としていたとすれば、明經もこの動きの中に位置付けることができる。すなわち、政府自らが博士弟子制度によって官吏候補者の養成に乗り出し、儒學の官學化を推進していくのに先立って、儒學の政治的重要度の高まりに伴い、廣く儒學に通曉している者を官僚機構に吸収できる基準として、新たに明

經という概念が生まれてきたと考えられるのである。

二 詔より見た明經科

いままでの考察で、明經の語は武帝の即位前後に成立し、儒學の官學化の動きに連動して官僚機構に儒學通曉者を吸収するための評價の語として機能したことが明らかとなった。明經の語は、成立當初から察舉科目として確立する可能性があったのである。しかし、當初は察舉科目として存在したのではなかった。それは平井氏が指摘したように、「以明經爲……」という表現は、明經科という察舉科目による察舉とはみなせないからである。ただ一方では明經科の場合、「舉明經」とあることのみによって、それを直ちに明經科による察舉とみなすことができない點がある。それは後で見るように、「舉明經」の例が見られるようになる前漢後半期に明經察舉を命ずる詔が存在せず、後漢時代に至ってはじめてその詔が見られることである。この被察舉例と詔の初見との時間的ずれをいかに解釋するかという點が、明經科を考える際の最も大きな問題なのである。

周知の通り、漢代（少なくとも武帝期以後）の登用法は、⁽¹⁶⁾任子など特殊なものを除くと、原則として各官廳の長官による推薦⁽¹⁶⁾||察舉によって二百石以上の官僚を登用する制度である。これは、定期的に行われる常科と不定期に皇帝の詔によって行われる制科の二つに大きく分かれる。常科・制科にはそれぞれいくつかの察舉科目が存在し、それらが一つの登用法體系を形成していた。そして例えば孝廉科ならば、察舉者が太守、被察舉者の初任官が比三百石の郎官というように、各察舉科目はそれぞれ、察舉者の範圍、被察舉者の初任官がほぼ一定している。⁽¹⁷⁾これらの點を確認するためには、個々の被察舉例を分析することが當然重要である。明經科については、平井氏がこれがある程度行っている。

しかし、個々の事例を検討する前提として、察舉を命ずる詔の分析が必要なことはいうまでもない。察舉の詔は、常科ならば特別の制度の變更がないかぎり一度だけであるし、制科の場合は必要に應じて出される。これによって、その察舉

科目が開始された時期と、それが常科であるか制科であるかの判断ができる。また詔には察舉者の範圍が示されている。すなわち、察舉の詔を分析することによって、その察舉科目の性格の概要を知ることができるのである。ところが明經科については、詔を十分に分析した研究はほとんどない。その結果、明經科を常科と見るものと制科と見るものに大きく分かれ、その初任官にもさまざまな説が見られる。⁽¹⁸⁾特にその察舉開始の時期については、前漢武帝期と見るものから後漢章帝期と見るものまで、實に一〇〇年以上の開きがあるのである。⁽²⁰⁾このような状況では、被察舉例と考えられる「舉明經」の例をいくら検討しても、明經科の性格を正確に判断することはできない。そこでまず、明經察舉の詔がいつどのような形で出されたのかを確認し、そこから明經科の性格を考えていくことにしよう。

明經察舉を命ずる詔が最初に確認されるのは、『後漢書』紀三章帝紀に、

郡國をして明經なる者を上らしむこと、口十萬以上は五人、十萬に満たざれば三人。

とある元和二年（八五）五月の詔である。これでは、それ以前に存在する「舉明經」の例が本當に明經科による察舉だったのかどうか、疑わざるを得ないであろう。そして明經察舉を命ずる詔は、後漢時代にもう一度出されている。それは、『後漢書』紀六質帝紀の本初元年（一四六）夏四月の條に、

郡國をして明經を舉げしむ。⁽²¹⁾

とあるものである。このように同じ内容の察舉の命令が二度出されていることは、明經科が制科として行われたことを物語る。さらにいずれも郡國に對して察舉の命令が出されていることから、察舉者が郡國の守相だったことが判明する。なお明經科が制科として行われたことは、元和二年の詔の前半部分からも判明する。そこには、この當時七郡に鳳皇・黃龍・鸞鳥が集まり、白鳥・神雀・甘露がしばしば臻ったという瑞祥があり、これに對して爵の賜與などの恩施が行われたことが記され、⁽²²⁾明經の察舉もこの一環として行われたのである。制科は、日食や災害の際に行われることが多いが、このような瑞祥の場合に行われることもある。⁽²³⁾すなわち、詔から見るかぎり明經科は、郡國の守相を察舉者とする制科として

行われたといえよう。そうすると、元和二年の詔では十萬で線を引いて各郡國の人口數によつて明經の察舉數を規定しているが、これはあくまでこの時の明經察舉に對してのみ有效なのであつて、孝廉科のように、察舉數が郡國の人口數によつて決められ、その後恆常的にその割合によつて察舉したのとは、性格を異にすると考えられるのである。⁽²⁴⁾

ところで右の二つの詔からは、被察舉者の初任官は判明しない。しかし、これを類推し、さらに明經科の性格を教へてくれる史料が存在する。それは、『通典』卷一三選舉一に残る次の史料である。⁽²⁵⁾これを手がかりに、もう少し踏み込んで考察してみよう。

桓帝の建和(一四七—一四九)の初め詔して、諸學生の年十六以上のものを郡國の明經に比えて^{なぞら}試し、次第して名を上らしむ。高第十五人・上第十六人を郎と爲し、⁽²⁶⁾中第十七人を太子舍人と爲し、下第十七人を王家郎と爲す。

これは直接明經科について記したのではないが、ここに「郡國の明經に比えて試す」とあることに注目したい。「郡國の明經」とは、前の考察から明經科による察舉と見て間違ひなく、恐らくこの直前に察舉が行われたと考えられる。そうするとここの意味は、郡國から察舉された明經と同様の試験を諸學生に對して行うということになる。そしてこの試験が明經科と同様のものだったとすれば、その試験の結果によつて與えられる官も、明經科の初任官と同じだったことになる。すなわち右の詔から、明經科に察舉された者はまず試験が課され、その結果によつて比三百石の郎官および二百石の太子舍人・王家郎の官が初任官として與えられたといえそうである。

なお試験の結果によつて官僚を登用する場合、『通典』の記事に見えるように、試験の成績によつて上下の差を付け、その差を反映して初任官の官秩にも差があるのが一般的であつた。例えば前漢平帝期における博士弟子制度の射策では、甲科—郎官(四〇人)、乙科—太子舍人(二〇人)、丙科—文學掌故(二〇人、百石)である(『漢書』卷八八儒林傳)。また前に掲げた質帝紀の本初元年の記事には續いて、大將軍以下六百石に至るまでの官僚の子弟を太學で勉學させることが命ぜられ、一年後の試験の結果によつて與えられる官は高第一郎官(五人)、次—太子舍人(五人)だったことが記されている。⁽²⁸⁾

このように試験の成績は二ないし三段階にわけられるが、注目すべきことが三點ほどある。まず第一に、いずれの場合にも最上位の者（高第・上第・甲科）は郎官、それに次ぐ者（中第・乙科・次）は太子舍人と、與えられる官が一定していることである。第二には、三段階目の者（下第・丙科）の場合、この評價が行われないこともあるし、また行われても與えられる官（ここでは二百石の王家郎と百石の文學掌故）に幅があつたことである。そして第三には、いずれの場合にもそれぞれの成績の評價には定員（右の括弧内の數字）が設けられており、それ以上の受験者があつた場合には不合格者が出たと考えられることである。ここから、射策科・明經科をはじめとする試験による登用の場合、基本的に初任官として郎官と一段階官秩の低い太子舍人とが用意されており、それより低い評價の者も採用する時には太子舍人と同等かより低い官秩の官が與えられたが、全てが登用されるわけではなく不合格者も出たといえる。⁽²⁹⁾

以上の考察が正しいとすれば、『後漢書』紀六順帝紀の陽嘉元年（一三三）秋七月の條に、

丙辰、太學新たに成るを以て、明經を試し、下第の者は弟子に補す〔試明經、下第者補弟子〕。甲乙の科の員を増すこと各おの十人。郡國の耆儒九十人を除して郎・舍人に補す。⁽³⁰⁾

とあるのも、明經察學の記事と考えられる。確かに、ここには「明經を試す」とだけであり、この明經なる者がどのような範圍からどのようにして選ばれたのかはわからず、また下第者が（博士）弟子に補されるということも普通の察學では考えられないことから、これを直ちに明經察學の記事とみなすことはできない。しかしここに掲げた全體の内容からそれを確認することができる。

まず確認しておかなければならないのは、この記事が太學復興に關する一連の記事だということである。⁽³¹⁾すなわち、明經の試験、射策科の合格定員増、郡國耆儒の登用は、一定の關連性を持つのである。その關連性とは第一に、いうまでもなく官學としての儒學の復興を目指すものだったということである。しかし本稿との關連で注目すべきは、いずれも試験に關連する記事だという點である。郡國耆儒の登用については、試験を行ったとは記されていないが、除される官が郎

官・舍人だったことは、前の考察から試験を前提にしていたと考えられる。これを補強するのは、右の記事と同一の内容を記す『後漢書』傳五一左雄傳に、耆儒が除された官としてさらに「諸王國郎」が記されていることである。⁽³²⁾ 諸王國郎とは『通典』の王家郎に當たり、耆儒が試験の成績によってそれぞれの官に配當された必然性が高くなる。このことから、明經も耆儒と同時に郡國から推薦されたと考えられる。そうするとこの時の明經も、太學復興という慶事に對して行われた制科による察舉だといえよう。

それでは、耆儒と明經の違いは何だったのか。その一つは、對象とする年齢の相違が擧げられる。耆儒とは老儒者のことで、明經の中でも老人とみなされる者であろうが、その年齢は左雄傳によると六〇歳以上であり、この時はこれを境界線として明經と耆儒とに分けられたと考えられる。⁽³³⁾ このように分けたのは、全ての者が合格するか否かの差だったと考える。太學復興の記事は、順帝紀・左雄傳以外に『後漢書』傳六九上儒林傳序にも見え、そこには「郡國の耆儒を除して皆郎・舍人に補す」とあり、耆儒は全て官僚に登用されたのである。これに對して明經は、前に述べたように不合格となった者も存在したと考えられる。これが、耆儒と明經とに分ける大きな理由だったのである。

ところで、普通では考えられない下第の明經を博士弟子に補すということを、何故行つたのだろうか。これも、太學復興ということと深く關連すると考える。前に見たように、試験による登用の場合、基本的に郎官（高第）・太子舍人（中第）の官は用意されていたが、三段階目の評價Ⅱ下第は行われぬこともあった。このような状況のもとで、ここでは下第者のみが問題とされているのである。そうすると恐らく、一般的な郎官・太子舍人への登用を行うとともに、ここでは特別措置として下第を設けて博士弟子への採用を加えたものと考えられる。何故ならこの時の差し迫った問題として、太學の復興後における早期の充實があったと考えられるからである。太學の充實とは、學生數の増加もあるが、優秀な人材を確保し官僚を輩出することが重要であろう。その點、他の者と比較すれば多少能力は劣るが、一旦は明經と評價された者を博士弟子として採用するのは有利であつた。それ故に、彼らを下第と評價して博士弟子に採用し、さらに射策科の合格定

員をも増加したのであらう。⁽³⁴⁾

多少廻り道をしたが、以上の考察によって陽嘉元年の記事も明經察舉の記事とみなせるであらう。これによって少なくとも後漢時代には、章帝の元和二年（八五）・順帝の陽嘉元年（一三二）・質帝の本初元年（一四六）・桓帝の建和年間（一四七～一四九）と四度の明經察舉が行われたことになる。そしてそれは、郡國を對象とした制科として行われ、察舉よりもむしろ察舉後の試験に重きが置かれており、試験の結果によって就官する官は主に郎官・太子舍人であるが、時にはそれ以下のポストの場合もあったのである。この考察が正しいとすれば、明經科の性格としては、福井重雅氏が明らかにした至孝科や有道科と似ていることになる。⁽³⁵⁾

三 明經科の諸相

（一）「舉明經」の實態

ここでは、平井氏が明經科に察舉されたと判断した「舉明經」の例を取り上げ、右に詔を通して検討した明經科とどのような關係にあるのかを考えてみよう。次に分析の手がかりとして、「舉明經」と記される者を關連史料とともに、時期的に早いものから掲げておく。

a 翟方進——經博士受春秋。……以射策甲科爲郎。二三歲、舉明經遷議郎。……河平中、方進轉爲博士。

（『漢書』卷八四本傳）

b 金 欽——（金）涉從父弟欽、舉明經爲太子門大夫。哀帝卽位、爲太中大夫給事中。

（『漢書』卷六八金日磾傳）

c 袁 良——習孟氏易。平帝時、舉明經、爲太子舍人。

（『後漢書』傳三五袁安傳）

d 董 鈞——習慶氏禮、事大鴻臚王臨。元始中、舉明經、遷虞議令。病去官。建武中、舉孝廉、辟司徒府。

e 李業——少有志操、介特。習魯詩、師博士許晃。元始中、舉明經、除爲郎。
 (『後漢書』傳六九儒林傳下・本傳)

f 張玄——河内河陽人也。少習顏氏春秋、兼通數家法。建武初、舉明經、補弘農文學、遷陳倉縣丞。……後玄去官。舉孝廉、除爲郎。
 (『後漢書』傳六九儒林傳下・本傳)

g 魏應——任城人也。少好學。建武初、詣博士受業、習魯詩。……後歸爲郡吏。舉明經、除濟陰王文學。以疾免官。……永平初、爲博士。
 (『後漢書』傳六九儒林傳下・本傳)

h 戴憑——習京氏易。年十六、郡舉明經、徵試博士、拜郎中。
 (『後漢書』傳六九儒林傳上・本傳)

i 周榮——肅宗時、舉明經、辟司徒袁安府。
 (『後漢書』傳三五本傳)

以上の九例はいずれも、すでに平井氏が取り上げて分析しているものであり、これ以外に兩漢を通じて「舉明經」の例はない。まず彼らが明經に察舉されたと思われる時期を確認すると、翟方進(a)と金欽(b)は成帝期、袁良(c)・董鈞(d)・李業(e)は平帝期、張玄(f)・魏應(g)・戴憑(h)は光武帝期、周榮(i)は章帝期となる。すなわち、周榮を除く八名は、いずれも史料で明經察舉の詔が最初に確認される章帝期よりも以前に察舉されているのである。これでは、周榮は章帝の元和二年に察舉されたとはいえるが、それ以外の「舉明經」をいかに解釋すればよいか問題となる。しかし右の九例をよく見ると、成帝期(二名)・平帝期(三名)・光武帝期(三名)・章帝期(一名)と、前漢末から後漢初期の、しかもある皇帝の時に集中していることが判明する。このような一定の時期への事例の集中は、それが制科として行われた可能性を示唆する。また一部の者を除くと、詔から見た明經科と同様の内容を持っていることが明らかとなる。これらのことは、史料に明確に明經察舉を命ずる詔が残っていないなくても、制科としての明經科が行われたことを豫測させる。そこで次に、この九例を具體的に分析することにしよう。

最初に確認しなければならないのは、彼らが誰から察舉され、どのような官に就いたのかである。平井氏によると、察

舉者は郡太守であり、初任官は郎官・太子舍人・郡國文學だったという。これを確認すると、次のようになる。まず察舉者については、戴憑(h)が郡から察舉されており、また魏應(g)も郡吏であった時に明經に察舉されているから、恐らく彼も郡から察舉されたのであろう。そして周榮(i)も元和二年の察舉と考えられるから、察舉者は郡國の守相である。次に初任官については、李業(e)・戴憑(h)が郎官に就官し、袁良(c)が太子舍人、張玄(f)と魏應(g)が郡國文學にそれぞれ就官している。さらに戴憑(h)は「徴されて博士に試され」ているから、就官までの手續きが明經科と一致している。なお初任官の中で郡國文學については、少々説明が必要である。これは百石の屬吏であり、普通の察舉では就く地位としては考えられない。しかし彼らは出身の郡國とは異なる郡國の文學に就いているから、郡國の守相による一般的な屬吏の辟召ではなく、中央政府が行ったものと考えられる。このような例は、射策科に見られる。⁽³⁶⁾また前の詔の分析から、明經科の場合には下第に配當される官に幅があったと考えられる。このことから、郡國文學もその範圍内とみなせる。

以上のことから、「舉明經」と記されている者の多くは、詔から分析した明經科の性格と一致することが判明する。

ところが一方では、明經に察舉されて郎官から議郎(比六百石)に昇進した翟方進(a)、太子門大夫(六百石)になった金欽(b)という成帝期の二名、および平帝期に麴犧令(六百石)となった董鈞(d)のように、詔の分析からは考えられない高い官秩の官に就いている者もある。そうすると、この三名をいかに解釋するかが問題となるが、その中の董鈞(d)については史料が一部缺失していると考えられる。それは、彼が明經に察舉され「麴犧令に遷った」と記されている点である。普通「遷」の字が使われるのは、前任の官から新たな官への異動の場合である。しかし彼は、察舉される以前に官職に就いていた形跡はない。⁽³⁷⁾また彼は、麴犧令在職中に病氣を理由に官を去り、その後、後漢に入った建武年間に孝廉科に察舉されている。普通、六百石の初任官を持つ察舉科目によって就官した場合、その後、初任官の官秩の低い孝廉科(比三百石の郎官)に再び察舉されることはない。⁽³⁸⁾このことから彼の場合、「舉明經」と「遷麴犧令」の間に、明經察舉後

の初任官に關する記事が脱落していると判斷されるのである。そしてその初任官とは、郎官以下の官秩の官であつたことはいふまでもない。そうすると、成帝期の翟方進(a)・金欽(b)を除く七名の者が詔の分析と一致することになり、逆にこの二名が例外だつたことになる。

以上のように、察舉を命ずる詔がないにもかかわらず明經科と共通する内容が「舉明經」の例に見えたとすれば、逆にその時に明經科による察舉が行われたと判斷される。いま例外に屬する成帝期の例をしばらく措くとして、次に明確な詔のない平帝期と光武帝期について、その點を検討してみよう。

(二) 平帝期と光武帝期の明經

まず注目すべきは平帝期の三例である。實は、その中の董鈞(d)の傳に李賢が「前書〔漢書〕に、平帝の元始五年、明經を舉ぐ」と注しているのである。これは、元始五年(後五)に明經の察舉が行われたことを示唆する。

明確な詔がない中で、李賢が何故このように判斷したのだろうか。その根據を『漢書』に求めてみると、卷一二平帝紀の元始五年の條に、

天下の逸經・古記・天文・曆算・鍾律・小學・史篇・方術・本草に通知し、及び五經・論語・孝經・爾雅を以て教授する者を徵し、在所爲に一封の輶車に駕し、遣わして京師に詣らしむ。

という記事がある。さらに卷九十九王莽傳上の元始四年(後四)の條にも、

天下の一藝に通じ十一人以上に教授し、及び逸禮・古書・毛詩・周官・爾雅・天文・圖讖・鍾律・月令・兵法・史篇文字有り、その意に通知する者を徵し、皆公車に詣らしむ。

という記事がある。この二つの記事は、發布の歲が一年ずれており、さらに指定されている書籍名にも多少の異同があるが、恐らく同一のものだと考えられる。そして李賢がいうように平帝期に明經察舉が行われたとすれば、この二つの記事

を、おいて他にはない。何故なら、傍點を付した部分に該當する者は、まさに明經と形容されてしかるべきだからである。そしてここでは全國の者が對象とされている（「徵天下……者」）から、その推薦主體は郡國の守相であったことが豫想される。このことがいえるとすれば、この時に傍點に該當する者が郡國の守相から「明經」として察舉され、「舉明經」と記録されたとも考えられる。恐らく李賢もこのように解釋し、彼は平帝紀の記事によつて元始五年に明經の察舉が行われたと判斷したのであらう。そうすると、平帝の在位期間は五年と短く、またその年號は元始のみであるから、元始中に明經に察舉されたと記されている董鈞（d）・李業（e）はいうまでもなく、平帝の時に察舉されたと記されている袁良（c）も、元始四年か五年に察舉されたといえるであらう。すなわち、そこには明經の語は見えないが、この時も制科としての明經察舉だったと考えられるのである。

このように明確に明經察舉を命じていなくても、その内容が明經とされるにふさわしい場合、察舉された者は「舉明經」と記録されたとすれば、詔から分析した明經科と同様の傾向を示す光武帝期の場合も、この可能性を検討してみる必要がある。しかし光武帝期の場合、關係史料を調べてみても、そこには平帝期のような間接的に明經察舉を命ずる詔もみつからない。また明經に察舉された時期も、張玄（f）が建武の初めに察舉されているのに對して、魏應（g）はその頃太學におり、その後一旦郡に歸つてから明經に察舉されている。そして戴憑（h）も光武帝期といえるだけで詳しいことはわからず、この三名は同じ光武帝期といっても時間的に開きがある。このような事態をいかに解釋すべきなのだろうか。

そこで考えるべきは、制科が行われる場合、それを行うべき當時の政治的要求があったということである。明經科の場合、それは儒學との關連だといえる。それは、前に見た順帝期の察舉の場合、太學の復興との關連で行われたことに最も端的に表われている。また平帝期の場合も、王莽傳の記事から經書における異説の統一との關連で行われたことが判明する。⁽³⁹⁾そして章帝期の場合、瑞祥に對する恩施として行われたことから儒學との關連は明確ではないが、この時太學在學

中の者に布が支給されているから、儒學振興の一環として行われた可能性がある。そこで光武帝期にその可能性を探ると、建武五年（二九）の太學の再興と、中元元年（五六）の明堂・靈臺・辟雍の建設が挙げられる（『後漢書』紀一光武帝紀、傳六九上儒林傳序）。ここで明經察舉が行われる必然性は、極めて高い。しかし、これらは可能性であって、その察舉を命ずる詔が見出されない以上、現時點では保留とせざるを得ないであろう。

（三）成帝期の明經

さて、殘る成帝期の翟方進（a）・金欽（b）の二名については、この時期に察舉を命ずる詔がないばかりでなく、察舉後に就く官位にも、その他の時期の者との間に大きな開きがある。特に翟方進は、郎官であった時に明經に察舉され議郎に昇進しているのである。制科（特に前漢）の場合、二百石以上の現任官僚が察舉されることもあるが、同じ制科といっても明經科では、このようなことは考えられない。恐らくこの兩名の「舉明經」は、別の意味があったと考えられる。

その別の意味とは、評價の語としての明經だったということである。本稿で考察したように、それは官僚あるいは屬吏への採用を前提としていた。その中で屬吏への任用の場合とはかくとして、官僚への登用・昇進の際に明經が理由として使われる場合、その結果として比較的高い官秩の官が用意されていた。例えば前に挙げた睦弘は、明經なることによって在野から博士に登用されている。また韋玄成は、郎官から「經に明らかなるを以て擢かれて諫大夫と爲る」（『漢書』卷七三）というように昇進している。このような例と、成帝期の「舉明經」と記される例は近い。

また「舉」とあっても、必ずしも察舉を意味しない場合もある。後漢の例ではあるが、『後漢書』傳四四楊震傳に彼が太常になった時のこととして、

是より先、博士の選舉の多く實を以てせず。（楊）震、明經の名士楊倫等を舉薦す。

と記す。ここにいう「博士の選舉」とは、太常の職掌の一つである「博士を選試する毎に、其の能否を奏す」（『後漢書』

志二百官志二)を指し、博士に缺員が生じた場合に太常が随時に行うものであったと考えられる。楊震は、これが正常に機能していなかったので、改善するために明經の名士を舉薦したのであるから、この「舉薦」とは太常が「能否を奏」することに當たるに相違ない。その内容は、楊震傳の注に引く『謝承書』に「楊仲桓等五人を薦め、各おの家に従い博士に拜す」とあるように、太常が博士に相當する者を皇帝に推薦することであつた。そして楊震に舉薦された楊倫が「博士に特徵」された(『後漢書』傳六九儒林傳上)と記されているように、舉薦された者は最終的には皇帝の徵召を待たなければならなかった。すなわち、ここでいう「選舉」や「舉薦」とは、一般にいう察舉とは内容を異にし、皇帝への随時の推薦を意味するのである。このように、察舉を意味する「舉」という表現があつても、必ずしもそれがある察舉科目によって察舉されたともみなさなくてもよい場合もある。

以上のことからすると、「明經」の中でも例外に屬す翟方進・金欽の例は、必ずしも明經科によって察舉されたとみなさなくても、明經なる評價によって推薦されたとみなしてもよいことにならう。

四 明經科の成立とその性格

ここまで、まず詔の分析を通して明經科の概要を検討し、次いでその内容を個々の「明經」の例と照合した。その結果、「明經」と記される者の多くは、詔から得られた分析結果と共通性を持っていた。ここから「明經」と記される場合は、ほぼ明經科という察舉科目によって察舉されたと判断してよいと考えられる。しかし一部の例は、それと大きく懸け離れており、平井氏のように、全ての「明經」を明經科による察舉とみなすことはできないのである。

それでは、この察舉科目はいつ成立したのであろうか。この間に答えるのは、非常に難しい。何故なら、最初の察舉例と考えられる時期に、明確に「明經を察舉せよ」と命じた詔が見られないからである。

察舉科目の成立といえば、例えば「元光元年(前三四)冬十一月、初めて郡國をして孝廉を舉げしむこと各おの一人」

『漢書』卷六武帝紀とあるように、その察舉が開始あるいは行われる時に察舉科目名が明示されるのが普通である。ところが明經科の場合、本稿で考察したように、平帝期に間接的にその察舉が行われたといえるが、そこには「明經」の文字は見えない。そして光武帝期に至っては、その察舉が行われたことを間接的にでも伺えるような史料も存在せず、はじめて「明經」の文字が見えるのが、章帝の元和二年ということになる。

このように、被察舉例があるにもかかわらずそれに對應する察舉科目名が確認できない状況では、その察舉の開始時期を確定することはできない。そこで、その開始時期は平帝期から章帝期に至る時期のいつか、というほかない。しかしそれをあえて推測すると、光武帝期の可能性が最も高いと考える。何故なら、この時期には平帝期と並んで多くの者が察舉されており、また明經科の察舉が行われる可能性があるにもかかわらず、そこに察舉を命ずる詔が見えないからである。すなわち、察舉を命ずる詔が史料から脱落したと考えるのである。このように考えれば、明經科は、平帝期にその先驅けとなる察舉が行われ、光武帝期に確立したといえる。そしてそれは、郡國の守相を察舉者とする制科として行われ、被察舉者はまず試験を受けて、その成績によって二ないし三ランクに分けられ、最優秀者は郎官、それに次ぐ者は太子舍人、そして三段階目の評價が行われる場合は太子舍人と同等かそれ以下の官秩の官に就けられた。しかし、全ての者が就官するのではなく、不合格者も出たのである。

ところで、前に間接的に觸れたように、試験の結果によって初任官が與えられる點とその初任官の點で明經科は、博士弟子制度のもとで行われる常科の射策科とほぼ同様である。そのような察舉科目が何故、新たに登場し、しかも制科として行われなければならないのか。ここで、明經科の存在意義を考えなければならぬ。

以前に明らかにしたように、射策科は、元帝期における博士弟子定員の急増によってその存在意義を薄れさせ、前漢末にはその機能をほぼ停止させる。それと同時に、太學の官吏養成機關としての機能も變質する。そして一方では、博士弟子制度の成功によって、地方社會には多くの明經者が存在していた。⁽⁴¹⁾このような時期に、明經科は登場してくるのであ

る。そこで考えられるのは、明經科は射策科を補完する察舉科目ではなかったかということである。すなわち、機能しなくなった射策科に代って、變質傾向にある太學に限らずに全國の明經者を對象に行われたのが、明經科であったと考えられるのである。⁽⁴²⁾これは、明經科による察舉が多くの場合、太學あるいは儒學の振興との關連で行われていることに表われている。

ところが、明經科は察舉科目として、それほど重視されなかった。明經科の初任官は前に見たように、比三百石の郎官かそれ以下の官秩の官であり、郡國の屬吏に就けられる場合もあった。これは、孝廉科の初任官と同等かそれ以下であり、代表的な制科である賢良・方正科の初任官が六百石クラスであったことに比べればはるかに低い。その結果、明經科に察舉された者の中には董鈞(d)や魏應(e)のように、後に孝廉科にもう一度察舉される例も見られることになる。すなわち明經科は、制科であったにもかかわらず、常科の孝廉科よりも一段低い察舉科目として位置付けられていたのである。

このような察舉科目としての地位の低さは、明經科が試験制をとった結果、郎官を最高に、その成績に應じて段階的に官秩の低い官を用意したという點に求められる。しかしそれは、被察舉者のその後の昇進にも影響を與えるだろうし、ひいてはその察舉科目そのものの存在意義を失わせることになる。本稿で考察したように、章帝期以後何度か明經察舉が行われているにもかかわらず、章帝期の周榮(i)を最後に被察舉者が見られなくなる點に、これが如實に表われている。このような傾向は、射策科のたどった運命と同じである。すなわち、察舉數に對する官僚ポストの不足である。⁽⁴³⁾射策科は、博士弟子數に見合うだけのポストを用意しなかったことによって、その機能を停止させた。明經科も前に見たように、試験結果によって配當される官に定員が設けられており、察舉された者全てが就官するとは限らなかったのである。その結果、たとえ察舉された者がいたとしても、記録に残らないことになったと考えられるのである。

おわりに

明經は最初、評價の語として存在した。しかしそれは單なる評價の語としてではなく、當初から官僚・屬吏への採用と深くかわりを持っていた。このことから、やがて明經科という察舉科目として成立するのである。ところが、察舉科目として成立した明經科は、漢代登用法體系の中では、それほど重視された察舉科目ではなかった。

ところで、明經科が本稿で述べたような察舉科目としての性格を持つようになった背景には、より根本的な問題がある。それは、明經科を生み出す母體となった評價の語としての明經が、相對的にその重要度を低めてきたと考えられることである。最後に、この點を考察しよう。

評價の語としての明經は、前漢時代にはさまざまな場面で使われ、前に見たように六百石クラス以上の官僚への登用・昇進の理由ともなった。しかし後漢時代に入ると、「經に明らかなるを以て孝廉に擧げられ、東陵令に除さる」(『後漢書』傳六六循吏傳・劉寵傳)とあるように察舉理由となることはあっても、前漢のような狀況はほとんど見られなくなり、純然たる人物評價の語として一般的に使われるようになるのである。⁽⁴⁴⁾この背景には、明經者の普遍的な存在があると考ええる。

明經なることは、確かに兩漢を通じて重要であった。しかし、儒學が普及して明經者が増加すれば、その稀少價值としての存在意義は低くなるはずである。官僚機構では、前漢元帝期以後、主要ポストに儒家官僚が大勢を占めるようになる。⁽⁴⁵⁾一方思想界では周知の通り、前漢末から後漢にかけて讖緯説の出現や古文學の擡頭など儒學研究の深化・多様化の傾向が見られ、これに伴って前漢の一經專修から後漢の數家兼修へと、經學の學習形態も變化していく。⁽⁴⁶⁾このような狀況の中から、從來のいわゆる「章句の學」を止揚して、學問の統合化をはかる「博學」あるいは「通儒の學」と呼ばれるものが重要性を増してくる。⁽⁴⁷⁾この官僚層における儒家思想の普及と學問内容の高度化は、明經の評價を相對的に低くするに違いない。すなわち明經は、前漢時代には官僚になるための十分條件であったが、後漢時代には必要條件になったと考えら

れる。後漢時代には、もはや前漢時代のように「經術苟も明らかなれば、其の青紫を取ること俛して地芥を拾うが如し」とはいえなくなっていたのである。⁽⁴⁸⁾

このような趨勢のもとで成立した明經科は、當然その制約を受けざるを得ない。また當時、察舉科目としてはすでに常科に孝廉科、制科に賢良・方正科という代表的なものが定着しており、それらに察舉される者は、右の劉寵の例でもわかる通り、當然明經なることが前提であった。そこに屋上屋を架すような明經科を設けることは、ほとんど無意味に近いであらう。そのような中で成立した明經科は、ほとんど機能しなくなっていた射策科を補完する察舉科目として存在し、射策科と運命をとにもすることになったのである。

注

(1) 江村治樹『西漢官僚における『賢』と『能』』（『名古屋大學東洋史研究報告』四、一九七六年）四七～四八頁参照。

(2) 宮崎市定『九品官人法の研究——科舉前史——』（『東洋史研究會』一九五六年。のち『宮崎市定全集』六、岩波書店、一九九二年）参照。

(3) 本稿で参照したのは、次の五氏の研究である。いずれの研究も、その一部でしか言及していないので、その箇所もあわせて示しておく。

永田英正『漢代の選舉と官僚階級』（『東方學報』京都四一、一九七〇年）、一六八～一六九頁。

平井正士『漢代の學校制度考察上の二三の問題』（『杏林大學醫學部教養課程研究報告』四、一九七七年）、一〇三～一〇七頁。

黃留珠『秦漢仕進制度』（西北大學出版社、一九八五年）、一九〇～一九一頁。

福井重雅『漢代官吏登用制度の研究』（創文社、一九八八年）、二二・二八頁。

劉虹『中國選士制度史』（湖南教育出版社、一九九二年）、四〇～四一頁。

その他、明經科に言及した研究は多數あるが、いずれも右の五研究、特に黃氏の見解と大差はない。そこで本稿では、黃著書を一般的見解として取り扱うことにする。

(4) 注(3)平井前掲論文。

(5) その他『史記』には、褚少孫の補筆にかかる部分にも同様の例が見られる。それは、「(韋玄成)其人少時好讀書、明於詩・論語」と「(匡衡)其經以不中科、故明習」という、い

ずれも卷九六張丞相傳にある二例である。

- (6) 一例を挙げれば、『漢書』卷四八賈誼傳に「廷尉乃言誼年少頗通諸家之書。文帝召以爲博士」とある。これは文帝期の記事である。また『漢書』でも、明經ばかりではなく、これと同様の「明」の用法も武帝期以前の記事には見えない。

- (7) それは、『後漢書』傳五一左雄傳の「汝南謝廉・河南趙建年十二、各能通經、(左)雄並奏拜童子郎」と、『三國志』卷一三王朗傳の「(王朗)以通經拜郎中」の二例であり、前者は順帝期、後者は靈帝期の記事である。

- (8) 王吉については、注(11)を参照。

- (9) 『漢書』循吏傳・文翁傳

(文翁)乃選郡縣小吏開敏有材者張叔等十餘人親自飭厲、遣詣京師、受業博士、或學律令。減省少府用度、買刀布蜀物、齎計吏以遺博士。數歲、蜀生皆成就還歸、文翁以爲右職、用次察舉、官有至郡守刺史者。又修起學官於成都市中、招下縣子弟以爲學官弟子、爲除更繇、高者以補郡縣吏、次爲孝弟力田。常選學官優子、使在便坐受事。每出行縣、益從學官諸生明經飭行者與俱、使傳教令、出入閭閻。縣邑吏民見而榮之、數年、爭欲爲學官弟子、富人至出錢以求之。

この全文體を通して、文翁が學問を重視し、その優秀な者を屬吏として採用し、さらに官僚として察舉したことが判明する。

- (10) 鎌田重雄「漢朝の儒術と經術」(『秦漢政治制度の研究』第一篇第一章所收、日本學術振興會、一九六二年)。

- (11) 昭帝期では、「少好學明經、以郡吏舉孝廉爲郎」とある王吉(『漢書』卷七二)がいる。そして宣帝期では蓋寬饒(同卷七七)・張禹(卷八一)、元帝期では諸葛豐(卷七七)などがある。

- (12) 儒學の官學化については、富谷至『儒教の國教化』と『儒學の官學化』(『東洋史研究』三七—四、一九七九年)を参照。

- (13) これについては、注(12)富谷前掲論文にまとめられている。なお最近、福井重雅氏は「六經・六藝と五經——漢代における五經の成立——」(『中國史學』四、一九九四年)、および「秦漢時代における博士制度の展開——五經博士の設置をめぐる疑義再論——」(『東洋史研究』五四—一、一九九五年)において、前漢武帝期における五經博士の設置を疑う自説を補強している。

- (14) 拙稿「漢代博士弟子制度について——公孫弘の上奏文解釋を中心として——」(『鷹陵史學』一六、一九九〇年)参照。

- (15) 拙稿「漢代博士弟子制度の展開」(『鷹陵史學』一七、一九九一年)参照。

- (16) 注(2)宮崎前掲書、大庭脩「漢代官吏の辭令について」(『關西大學文學論集』一〇—一、一九六〇年)、永田英正「後漢の三公にみられる起家と出自について」(『東洋史研究』二四—三、一九六五年)、注(3)永田前掲論文、拙稿「漢代辟召制の確立」(『鷹陵史學』一五、一九八九年)などを参照。

- (17) 特に注(3)福井前掲書は全體を通して、賢良・方正科をは

じめとする制科を中心に、この點を考察している。

(18) 常科と見るのは福井氏（ただし後漢に限定）、制科（一般特科）と見るのは黄・劉の兩氏である。ちなみに、平井氏は「制度化された一つの選舉」（一〇六頁）と指摘するのにとどまり、常科か制科かの判断はしていない。（いずれも、注

(3)に掲げた研究の該當部分を参照。注(19)(20)も同じ。）

(19) 永田氏が「兩漢を通じて議郎とか郎中など、いわゆる郎官に任ぜられるのが一般的であった」とするのに對して、平井氏は、本文でも取り上げるように、郎官の他、それよりも官秩の低い太子舍人・郡國文學などもあったとする。

(20) 前漢武帝期と見るのは永田氏、時期は限定しないが武帝期以後とするのが黄氏、成帝期とするのが平井氏、後漢章帝期とするのが劉氏である。

(21) この記事は普通「令郡國舉明經年五十以上七十以下詣太學」を一文として扱い、察舉する明經に年齢制限を加えたものとして解釋される。しかし本稿では、「明經」と「年五十以上」との間で區切り、「郡國をして明經を擧げしめ、年五十以上七十以下のものを太學に詣らしむ」と讀んで、後者をいわゆる「耆儒」と解釋する。その理由については、注(33)を参照。

(22) 『後漢書』紀三章帝紀

五月戊申、詔曰、乃者、鳳皇・黃龍・鸞鳥比集七郡、或一郡再見、及白鳥・神雀・甘露屢臻。祖宗舊事、或班恩施。其賜天下吏爵、人三級。……賜博士弟子見在太學者布、人三匹。令郡國上明經者、口十萬以上五人、不滿十

萬三人。

(23) 福井重雅「漢代の選舉と制科の形成」（『社會科學討究』五二、一九七三年。のち注(3)福井前掲書、第二章第一節所收）を参照。

(24) 周知のように、和帝期に丁鴻らの提案によつて、孝廉科は郡國の口數二〇萬につき一人を察舉することになった（『後漢書』傳二七丁鴻傳）。

多くの研究は、この孝廉科と同様に明經科も、章帝の元和二年の記事を定員制を設けたものとして解釋している。明經科を常科と見る立場からはこのようなことがいえるかもしれないが（注(3)福井前掲書、二八頁）、明經科を制科と見ると、この記事を恆常的に行われることを前提とするような定員制の採用と見ることはできない。制科ならば、その察舉の詔が出されるつどに、その察舉數が示されるからである。

なお、劉氏は「從此、明經一科從原博士弟子射策經學及賢良策試經義中分離出來、且一度屬歲舉之列」として、この時点で明經科が制科から常科に變つたとする（注(3)劉前掲書、四一頁）。

(25) この記事は、『通典』より成立の早い後漢關連史料には見えない。しかし、いわゆる『七家後漢書』という多くの後漢關連史料が存在したにもかかわらず、それらの大部分が散佚してしまっている現状からすると、『通典』の記事も信頼がおけると考える。

(26) 『通典』は「中郎」（比六百石）とするが、この記事は『文獻通考』卷四〇學校一にも引かれており、ここでは「郎」

(比三百石)としている。「中郎」では、ここに掲げられている他の官と官秩の開きが大きいので、ここでは『文獻通考』の記事をとった。

(27) ここでいう試験とは、制科の際に一般に行われる「對策」をいうのではなく、博士弟子制度のもとで行われる「射策」と同様のいわば學力試験である。

(28) 『後漢書』紀六質帝紀

自大將軍至六百石皆遣子受業、歲滿課試、以高第五人補郎中、次五人太子舍人。

(29) 『通典』の合格者を合計すると六五名になる。これを章帝の時に察舉された者の數(人口一〇萬以上の郡國は五人ずつ、それ以下は三人ずつ)と比較すると、大量の不合格者が豫想される。何故なら、後漢時代の郡國數は一〇〇を超え、各郡國から一人ずつ察舉したとしても四〇名前後の者が不合格となるからである。

(30) 順帝紀と同じ内容の記事は、傳五一左雄傳・傳六九上儒林傳序にもあり、それぞれの間に若干の文字の異同がある。

左雄傳——陽嘉元年、太學新成、詔試明經者補弟子、增甲乙之科員各十人、除京師及郡國耆儒年六十以上爲郎・舍人・諸王國郎者百三十八人。

儒林傳——試明經、下第補弟子、增甲乙之科員各十人、除郡國耆儒皆補郎・舍人。

左雄傳の記事には、「明經者」とあつて「下第」の二文字がないが、これは「下第」が脱落したものと考えられる。また本文では、明經と下第者の間で切つて讀んだが、そこで切

らずに「明經の下第者を試し」と讀むことも可能である。このように讀むと、一旦明經科の試験が行われ、その後、下第者に對してもう一度試験を行ったことになる。そうすると本稿の考え方では、この直前に明經察舉が行われたことになるが、いづれにしても本稿の論旨に抵觸することはない。

(31) 周知の通り、太學復興の經緯については、『後漢書』傳六九上儒林傳序に「自安帝覽政、薄於藝文、博士倚席不講、朋徒相視怠散、學舍頽敝、鞠爲園蔬、牧兒斃豎、至於新刈其下。順帝感翟酺之言、乃更脩學宇」と記す。

(32) 注(30)に掲げた左雄傳の記事參照。

(33) 同右。なお、このように考えれば、注(21)に示した質帝紀の記事も、「明經」と「年五十以上」以下とを分けて考え、後者をここでいう「耆儒」と見るのが妥當だと考へる。

(34) しかしこの當時すでに、射策科が機能していなかったことは、注(15)の拙稿で述べた。

なお、明經下第者が博士弟子に補されることについて、劉氏は「即對於考試不合格的、需進太學中補爲弟子、以便深研儒術。明經下第者補太學弟子以期它日竟業再赴察舉之爲、溝通了察舉與學校間的聯系、爲後世科舉時代、科舉必由學校之濫觴」と述べる(注(3)劉前掲書、四一頁)。

(35) 福井氏は「至孝と有道を媒介とする選舉形式は、賢良・方正などの制科と孝廉などの常舉との中間に介在し、それらを折衷して成立した、獨特の人材登用制度であつたということも可能ではなからうか」と述べる(同氏「後漢の選舉科目『至孝』『有道』」(『史觀』一一一、一九八四年)。のち注

(3) 福井前掲書、第三章第五節所收、三七〇頁。制科として行われ、初任官が郎官以下であったという点で、明經科も至孝科・有道科と類似する。

(36) 注(14)(15)前掲拙稿参照。

(37) 平井氏は「習慶氏禮、事大鴻臚王臨」の部分で、大鴻臚の王臨の屬吏となつたと解釋する(注(3)平井前掲論文、一〇六頁)が、この部分は慶氏禮を王臨に師事して學んだということである。

(38) 拙稿「後漢の官吏登用法に關する二、三の問題」(佛敎大學學院研究紀要)一五、一九八七年)参照。

去官後に孝廉科に察舉された例を挙げると、まず本文で取り上げた張玄(f)が、明經に察舉されて弘農文學となり、陳倉縣丞に遷つた後に官を去って孝廉科に察舉されている。

その他に、周勰が任子によって郎官となつてから官を去り孝廉科に察舉され(後漢書・傳五)、また王朗が通經によって郎中となり菑丘長で官を去つた後に孝廉科に察舉された(『三國志』卷一三)例がある(ただしこの兩名は孝廉科による察舉を拒否している)。この三例を一見するとわかるように、その初任官はいずれも孝廉科のそれと同等の郎官か、またはそれ以下の官秩の官であり、董鈞を除くと、初任官が六百石以上の官であつた者が去官後に孝廉科に察舉された例は見當らない。これによって、董鈞も明經に察舉された後、まず郎官かそれ以下の官に就官し、その後、廩犧令に遷つたと考えられるのである。ただ董鈞の場合、去官直前の官が六百石であつたことが氣になる。そこで上の三例の去官直前の

官を調べてみると、董鈞ほど高くはないものの四百石から三百石の縣長であつた王朗の例があるから、去官後に再び登用される場合、去官直前の官秩ではなく、以前にどのような察舉科目によって就官したのが重視されたのであろう。

(39) 『漢書』王莽傳上には、本文に引いた史料の前後に次のような記事がある。

此歲(元始四年)、莽奏起明堂・辟雍・靈臺、爲學者築舍萬區、作市・常滿倉、制度甚盛。立樂經、益博士員、經各五人。(本文引用史料)。網羅天下異能之士、至者前後千數、皆令記說庭中、將令正乖謬、壹異說云。

(40) 福井重雅「漢代の制科における察舉の問題」(『早稻田大學學院文學研究紀要』二四、一九七八年。のち注(3)福井前掲書、第二章第二節所收)参照。

(41) 注(15)前掲拙稿参照。

(42) 平井氏は、明經科の察舉科目としての成立は、停滯傾向にある博士弟子制度に對して在野の明經者が増大した結果だとする。外見上はそうかもしれないが、その前提として氏は、射策が明經者にも開放されたとする(注(3)平井前掲論文、および同氏「公孫弘上奏の功令について」(『杏林大學醫學部進學課程研究報告』一、一九七四年)を参照)。しかし、射策が明經者に開放されたとは考えられない(注(15)前掲拙稿、六四く六五頁)ので、氏の説にはわかに從えない。

(43) 注(15)前掲拙稿参照。

(44) 前漢時代に、本文で取り上げた者以外に、明經なる理由によって官僚となつた者の名を『漢書』から列舉すると、劉向

(卷三六)・薛廣德・平當・彭宣(以上、卷七二)・王駿・貢禹(以上、卷七二)・孫寶(卷七七)・蕭望之(卷七八)・房鳳(卷八八)・龔遂(卷八九)などがある(その他、兩漢交替期に若干存在する)。一方後漢時代に入ると、劉寵以外では「肅宗集諸儒於白虎觀、(魯)恭特以明經得召、與其議」とある魯恭(『後漢書』傳一五)、「永平初、辟司空府、以明經給事中、再遷越騎司馬」とある鄭衆(同傳二六)、「少以三公子經明行脩舉孝廉、不就」とある張綱(『三國志』卷四五注引『續漢書』)などを数えるに過ぎなくなり、逆に「少明經講授、以禮讓化鄉里」(『後漢書』傳五七)とある蔡衍などのように、直接官僚への登用と結び付かない純然たる評價の場合が多くなる。

(45) 平井正士「漢代に於ける儒家官僚の公卿層への浸潤」(『歴史における民衆と文化——酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集——』所收、國書刊行會、一九八二年)参照。

(46) 狩野直喜「兩漢文學考」(同氏『兩漢學術考』所收、筑摩書房、一九六四年)参照。

(47) 加賀榮治『中國古典解釋史 魏晉篇』(勁草書房、一九六四年)第一章第三節一、「古注」の完成に示された通儒の學の確立」参照。

(48) 『通典』卷二七職官九・國子博士の條の注に「其督郵板狀曰『生事愛敬、喪沒如禮。理易・尚書・孝經・論語、兼崇載籍、窮微闡奧、師事某官、經明受謝。見授門徒尙五十人以上、正席謝生、三郡三人、隱居樂道、不求聞達。身無金痼疾、三十六屬不與妖惡交通王侯賞賜。行應四科、經任博士』下言某官某甲保舉」と記す一文がある。これは、博士候補者を推薦する時の一種のマニユアルである。また「師事某官、經明受謝……三郡三人」の部分が缺けるものの、『漢官儀』(『後漢書』傳二三朱浮傳注引)にも同文があり、この督郵板狀は後漢時代のもと考えられる。博士の推薦文であるから、當然明經なることが前提とはなるが、このように一定の形式の文書が存在することからも、當時の明經の普遍性が読み取れると考える。

〔附記〕

1 本稿は、東洋史研究會一九九四年度大會で報告した内容を骨子とし、それに大幅に補訂・加筆を行ったものである。

2 本稿は、佛教大學より交付された平成六年度特別研究助成費に基づく研究成果の一部である。

A STUDY OF THE MING-JING 明經 IN THE HAN DYNASTY

NISHIKAWA Toshifumi

Previous studies of the Classicist of a recommendation category 明經科 have been inadequate. This paper examines not only the Classicist, but also the specifics of the general term “Ming-Jing” 明經, meaning to be well-versed in the classics. The conclusions are as follows:

(1) The term “Ming-Jing” appeared around the time of the enthronement of Emperor Wu 武帝 of the Former Han dynasty, and its appearance was closely connected with the official recognition of Confucianism. As a result, from its very inception the term was employed in connection with the appointment of governmental officials and clerks. Thus it was established as a recommendation category.

(2) The position of Classicist was conferred as a special recommendation by decree, the nominators being the Commandery governor and the Counselor-delegate. The nominees were examined, and on the basis of the results of this were accorded the ranks of Gentleman 郎官 (300 bushels), Secretary to the Heir Apparent 太子舍人 (200 bushels), etc. Not all the nominees, however, passed the examinations, and those who were not successful were disqualified.

(3) The position of Classicist that comprised these features was established in the period from the end of the Former Han dynasty to the beginning of the Latter Han dynasty. At that time there existed many officials who held the title of “Ming-Jing”, and other recommendation categories presupposed the holding of this title. In view of these facts, the position of Classicist can be held to be of little account.